

米国黒船「バイキング号」漂着について —漂着から記念碑建立までのあらまし—

広瀬節良

一般社団法人御蔵島観光協会 〒100-1301 東京都御蔵島村

はじめに

今から約 150 年前に御蔵島で起きた黒船バイキング号の漂着という事件は世間にはあまり知られていない。ましてやこの事件は漂着から約 1 世紀の間、御蔵島の歴史の中に埋もれてしまい島でも忘れ去られようとしていた。それがある時思わぬことで光があたり「発掘」が進んでいくこととなった。

そのことについては「御蔵島西洋黒船漂着一件記」(1969 年、高橋基生著)に詳しく述べられている。この本の発刊当時は NHK で特番が放映されたり、その後高等学校の教科書にも取りあげられたりし、それなりの耳目を集めた。しかしそれからまたかなりの時間が経過した。

2009 年に御蔵島観光資料館が開館して、黒船バイキング号コーナーが設置され、簡単にこの事件を知ることができるようになった。しかし展示内容だけではこの事件の全容を伝えきれない。そこでその補完の意味を含めて事件の詳細、そして「発掘」、その後の経緯をなるべく平易にまとめてみることにした。日本の小離島である御蔵島の歴史に刻まれた、世界に誇るべきこの事件を伝え遺していくことが大切と考える。さらにこの事件について詳しく知る手がかりになるよう、知りうる限りの文献資料、参考資料も付け加えた。

1. 幕末の動乱期に御蔵島に漂着

文久 3 年 4 月 18 日 (旧暦, 新暦 1863 年 6 月 18 日), 御蔵島に米国帆船「バイキング号」が漂着した。バイキング号は全長約 60m, 横幅約 9m, 1394 トンのクリッパー帆船で、船籍港は米国マサチューセッツ州ニューベッドフォードである。乗船していたのは米国人船員 23 人と清国人 460 人の総勢 483 人である。この時、バイキング号は香港で清国人を乗せ母国へ帰る途中であった。米国では

西海岸のゴールドラッシュで出稼ぎ移民を必要としていた時代である。

日本ではこれより 10 年前の 1853 年にペリーが浦賀に出現してから、幕藩体制は混乱を増し攘夷・開国の嵐が吹き荒れていた。そんな中で島を襲った突然の出来事である。外国船漂着の報は地役人に伝えられ、島では異国船来襲かもしれないと討死も覚悟したようだ。だがバイキング号は軍艦ではなく商船とわかり対応を検討する。しかし乗船員よりも人口のない島民が、まともに外国人とやりとりするのは困難を極めた。

島には「漂着人・漂着物取扱方」という定めがあり、それはあくまで国内船対応の想定であり、日本漁船が漂着遭難した場合に地役人が適切な処置をほどこし、幕府直轄の伊豆韮山にある代官に報告すればそれで事が済んだ。だがバイキング号の漂着は、その範疇を遥かに超えたものであった。黒船の出現で「泰平のねむりをさますじょうきせんたつた四はいでよるも眠られず」と風刺された時代で、国レベルでさえ外国船の出現は難問であったと思われる。

2. 外国人を救助

御蔵島では国内の混乱をよそに、海に生きる民俗（島民）として、どんな人種であろうと遭難者を救助することに全力を尽くすことにしたようだ。その間、伊豆の代官所へは早船を出してバイキング号の座礁を知らせた。

まず、大破したバイキング号での宿泊は危険なので、島にある 2 隻の小舟を提供して乗組員たちの上陸に協力した。しかし言葉が通じないのでやりとりが順調に運ばないことがしばしばであったようだ。460 名の清国人は夕方までに島に上陸して海岸に 50 張りほどの粗末なテント小屋をつくり、船員は船に残った。

バイキング号の船長タウンゼントは、本船のボートを降ろし神奈川の米国領事館に座礁の報告に向かった。言葉がうまく通じないために、島側にはこの行為が黒船の援軍をもとめに行ったのではないかと、との懸念もあった。

翌日は船員と清国人が総出で船に残っている艀装品、積載物、食料などを運び降ろした。バイキング号はさらにひどく破損が進み船員たちも上陸した。

御蔵島の海岸は砂浜ではなく、急峻な崖の下で玉石がゴロゴロしており海岸幅も狭く、大きな波が寄せると危険な場所である。船員、清国人たちは島側に対して村内宿泊所の提供を求めた。島側はこれに応じ、村内約 60 軒の民家のうち約半数の 30 軒を提供した。なお安全を考慮して女、老人、子どもたちは島の反対側の南郷地区の小屋へ一時避難させた。

この一連の交渉役に抜擢されたのは、村役所の書役・栗本市郎左衛門（のちに栗本一郎と改称）という 32 歳の若き指導者であった。栗本一郎は、日本中が尊王攘夷だ、開国だと大混乱している時であっても、人間が人間を救助すべきは当

然のこととして村民の総意をまとめていく。同時に遭難した外国人に対してはあくまで人道的に接した。この事件を発掘調査し世に知らしめた東大の高橋基生先生（後述）は栗本一郎について「その人間性，見識，統率力，危機管理能力など目を見張るものがある，中央にいたら相当評価された人物となっていたであろう」と述べている。

3.外国人と島民との交流

タウンゼント船長の急報を受けた神奈川駐米領事フィッシャーは，神奈川港に停泊していた米国軍艦を御蔵島に急行させた。その任務は乗組員の救助と連れ戻しである。遭難から6日目の23日の未明，島に本物の軍艦がきたので村民の驚きは大きかったが，すぐに遭難者の運搬のためとわかり安心したようだ。この軍艦の名前は「ワイオミング号」といい，1457トンの蒸気スループ艦である。

ワイオミング号は島の沖にとどまり，村人も小舟を提供して清国人の乗船に協力した。そしてワイオミング号は清国人460人を乗せて伊豆下田へ向かった。清国人はその1ヶ月後別の船で米国に向かったということである。

ちなみにワイオミング号はこの後すぐに欧米の連合艦隊の一員として下関戦争に参加して，長州藩に壊滅的な被害を与えている。（前年は生麦事件などが勃発し日本国中，外国と戦争状態の中，御蔵島では外国人を助ける事に全力を挙げていたのである）

島にはその後，米国の船員たち，およびワイオミング号に同乗してきた神奈川奉行所の役人が滞在した。船員たちは船の艀装品や備品の回収等残務処理のために残留した。島民はこれらの人に対して家を提供し，難破船の片付けなど，米国側の求めに応じて手伝いをした。休日には一緒に魚釣りもしている。さらに，ある日の夕方に村の広場に老若男女村中の者が集まり，米国船員のダンスを見学した，という記録が残されている。

このようにしてこの間，船員と村人の親交は深まっていった。なかでも職業柄もともと米国人と接触の多かったのは前述の栗本一郎であり，米国人と村民の橋渡し役として努力した。

彼は短期間に独自の「英単語帳」を作成し，少しでもやりとりをスムーズに運ぼうと努力した（鎖国中の幕末にかかわらず，絶海の孤島に一民間人が作成した「英単語帳」が存在するのである。）。後に「文久三年御蔵島英語単語帳」（1998年）を出版した小林亥一氏は，この単語帳を「日本最初の発音付英語単語帳」と本の帯で紹介している。また多摩美術大学教授の佐渡谷紀代子氏は栗本一郎の「英単語帳」を米国ボストン大学教授のダニエル・ブーン氏に発音などを照会した。その結果，有名なジョン万次郎の「亜米利加詞」と比較しても，そのカタカ

ナ表記の発音の的確さに驚き「この人の耳の良さは万次郎のそれに勝るとも劣らない」という評価でダニエル氏も称賛している。

当時バイキング号の船員であったカートライト氏が孫に残した「回想手記」が米国で見つかっている。その中には「島の若い指導者は、陽気な人で、我々を本当に親切にもてなしてくれた。彼はごく僅かだが英語の単語を理解した。もちろん多くを話し合えなかったが、それでもどうにかお互いの意思は通じた。」と記している。さらに「この島の日本人は親切で、その上正直であるのには驚いた。かれらは遭難者から金を受け取る事を潔しとはしなかった。それは村民全員に徹底していた。」と手記には綴られている。

回収作業がほぼ終了したこと、船員らの食料が欠乏してきたことなどで、遭難後約 40 日後の 5 月 28 日（旧暦）、船員 21 人が島の廻船で下田に向かった。そして 10 日後、残務処理のために残った船員 2 人と神奈川奉行所の役人も迎えにきた船で離島した。このようにしてこの事件は一応終結するのである。

4. 埋もれたバイキング号漂着事件

バイキング号が御蔵島に漂着した 1863 年（文久 3 年）は日本も米国も共に緊迫激動の時期であった。米国ではリンカーンの「奴隷解放宣言」が発せられたのがこの年であり、南北戦争も勃発から 3 年目を迎えていた。日本では攘夷論がわき上がり薩長が外国と戦闘状態となり、また明治維新の前夜で、新撰組等も作られた年である。このような内外の歴史の転換期の中で、絶海の孤島で展開されたこの国際的人道ストーリーは、幕府や米国政府にきちんと届く事なく埋もれてしまったのである。

それから約 1 世紀、時代は移り島民も代がかわり、バイキング号漂着事件は島の伝承からも消えかけていた。そんな折り 1960 年に一人の植物学者が御蔵島に上陸した。東京大学の高橋基生（以降、高橋先生とする）である。この高橋先生の来島は正に御蔵島にとって幸運をもたらすこととなった。

彼は神社の灯籠の台座になっているもの（キャプスタン）や島では産出しない岩石を使用した石垣や階段に興味をもち、古老に聞いた所、1 世紀前に黒船の漂着があった事を知る。これらのものはその船の積載物だったのである。彼によって埋もれていたバイキング号漂着事件の掘り起こしが始まるのである。（ちなみに「幕末三舟」と言われた人物に「勝海舟」「山岡鉄舟」「高橋泥舟」がいる。高橋先生は泥舟の子孫であり、歴史にも相当の興味と知識を持たれていたのが幸いしたのかもしれない）

5. バイキング号事件の「発掘」が進む

高橋先生はこの事件にたいへんな興味をもち、島の旧家（前述の栗本一郎宅）で当時の記録「西洋黒船漂難一件記」を見せられるにおよんで、バイキング号の遺品、当時の島民との関係、乗組員のその後等々「調査する自分を止める事が出来なかった」と述べている。

そしてこの話を米国の関係各所へ伝え、調査の協力を得ようとするが、米国の方では初めのうちは半信半疑で、中には今更金目当ての難癖をつけてきたのではないかと思う人もいたらしい。

ところが、米国第 35 代大統領ジョン・F・ケネディー氏の弟で当時、司法長官であったロバート・F・ケネディー氏がこの話を知り、国務長官ラスク氏を通じて公文書保存書を調べさせた。そうしたら当時の神奈川領事の提出したバイキング号の報告書が見つかり、確かにこの事件が存在して、御蔵島の人たちが救助に力を尽くした事が判明した。

また日本国内でも、当時の駐日米大使ライシャワー氏がこの話に大変感激し、本件の専門の係として、東京アメリカ文化センター館長のピカン氏を指名した。このことによって調査は日米全体に広がりを見せ始めた。

バイキング号の船籍地が米国のボストンの近くのニューベッドフォードという事が判明したので、高橋先生はニューベッドフォード市にこの御蔵島の人たちが行った救助の話を知らせた。市の協力のもと、市内にある「捕鯨博物館」の倉庫にバイキング号の油絵と航海日誌がある事が判明し、日本に知らされた。高橋先生も自費で渡米して調査をすすめ、バイキング号の製造所なども判明した。さらには、入手したバイキング号の設計図をもとに、精密な船の模型を作成して御蔵島に寄贈している（現在、御蔵島郷土資料館に展示してある）。

この間、御蔵島でも遭難現場に近い海中よりバイキング号の錨が見つかり、引き上げられた。（これはサブの錨のようだ。戦前にもっと大きいメインの錨があったそうだが内地に供出？されたか、売ってしまったようである。）

6. 日米双方に友好の記念碑がつくられる

米国では、当時バイキング号が米国に帰って来ないのは南北戦争中だったのでサンフランシスコからニューヨークへ向かう途中の港で南軍に拿捕されてしまった、と考えられ忘れ去られていた。そこへ高橋先生からバイキング号が日本に漂着していたとの情報が届いたものだから、とても驚かれたという事であった。

ニューベッドフォード市では市民がこの漂着救助の話に感激し、感謝の気持ちとして御蔵島に記念碑を建てるための募金活動へと発展していった。そして当時のお金で約 1700 ドル（約 61 万円）集まり、記念青銅板 2 枚が作成されることになった。これには日本語、英語の両併記で事件のあらましと記念碑建立のいき

さつが表記されている。高橋先生からの依頼により、日本文は書道の大家・伊藤東海氏が書き、レリーフは佐藤一郎氏が制作した。お二人とも無料で引き受けられたということである。（佐藤氏は、長野県上高地にある日本アルプスの名付け親である有名なウエストンのレリーフを作成した人である）この青銅板は1枚を御蔵島に、もう1枚はボストンの捕鯨博物館に届けられ記念碑として飾られている。

高橋先生の奔走で御蔵島では昭和42年（1967年）5月18日にバイキング号記念碑の除幕式が挙行された。村始まって以来の国際的行事には高橋先生、村長はじめ全村民に加え、米国大使館の関係者、また前述のカートライト氏の孫にあたるマリオン氏などが遠路はるばる米国から参加した。7月23日にはボストンの捕鯨博物館で記念碑除幕式が挙行された。御蔵島の記念除幕式に花を添えたのはロバート・F・ケネディーによる以下のメッセージである。

WASHIHINGTON.D.C

I am pleased to send my greetings to the people of Mikurajima as you commemorate the story of the Viking.

The friendship and good will which was shown by your ancestors to ours stands as a symbol of the warmth and understanding among people which we all hope will dominate international relations in the future.

My warmest best wishes to you.

Robert F. Kennedy

『バイキング号記念除幕式にあたり、御蔵島の皆様にご挨拶を申し上げますことを、喜びとするものであります。

皆様の祖先が、我々の祖先に示された友情と親善は、将来の国際関係に重要な役割を果たすような、人間の温かさと理解の象徴として光り輝くものと申せましょう。心からお祝い申し上げます』

ロバート・F・ケネディー

（ちなみにロバート・F・ケネディー氏は2017年まで駐日アメリカ大使であったキャロライン氏の叔父でもある）

終わりに

幕末の混乱期に起きたこの黒船漂着という国際事件に関して御蔵島は幕府から援助も保障も受ける事ができなかった。そんな中でも栗本一郎をはじめとする島人は人道と博愛をもってまさに孤軍奮闘で「異文化交流」を成し遂げたのである。御蔵島の歴史に燦然と輝く、先人が残してくれたこの史実と高橋先生の業績が、島に生きる人はもちろんもっと多くの人に知られ、後世に伝わっていく事を願わずにはいられない。本稿がその一助となれば幸いである。

バイキング号事件に関わる主な資料

[文献]

- 「英語単語帳」栗本一郎（1863）栗本家所蔵
- 「西洋黒船漂難一件記」栗本一郎手記（1864年）栗本家所蔵
- 「カートライト回想記」ベンジャミン・カートライト手記（1902）
- 「御蔵島西洋黒船漂着一件記 1863年」高橋基生著（1969）ノーベル書房
- 「島の教育者・栗本一郎左衛門」広瀬節良卒業論文（1978）
- 「御蔵島子ども風土記2」御蔵島小学校（1981）
- 「文久三年・海暗島」川崎九越 NHK放送文学賞受賞作（1984）
- 「栗本忠吉遺稿集」栗本健（1987）
- 「文久3年英単語帳—栗本一郎と漂難者たちとのコミュニケーション—
佐渡谷紀代子（1991）多摩美術大学研究紀要
- 「ATLAS ENGLISH COURSE 1」 高等学校教科用図書（1992）三友社
—Lesson8 Mikurajima and the Viking—
- 「文久3年英単語帳その2—栗本一郎の日記とジョン万次郎の発音表記の紹介—
佐渡谷紀代子（1994）多摩美術大学研究紀要
- 「文久三年御蔵島英語単語帳」小林亥一著（1998）小学館
- 「高橋基生先生資料集」顕彰碑建立除幕式資料（1999）
- 「自然の中に人生がある-高橋基生・御蔵島博物誌-」御蔵島村役場（2000）
- 「東京都道徳教育郷土資料集」東京都教育委員会（2006）
- 「御蔵島史」御蔵島村役場（2006）
- 「バイキング号御蔵島漂着てん末記」山田廸生（2009）雑誌ラメール
- 「わたしたちの御蔵島」御蔵島教育委員会（2011）
- 「バイキング号事件と御蔵島の異文化交流」坪井健（2014）
—黒船救難とある植物学者の活躍—
- 「みくらのむかしばなし みくらかたり」広瀬節良（2015）観光協会
- 「地域の発展につくす～おらが島の栗本一郎」御蔵島小学校 広瀬節良

—東京都教育研究員　へき地部会研究授業開発教材・資料（1995）—
「バイキング号と明治維新」坪田小学校　合津郁夫
—小学校社会科授業案・地域教材の開発—
「米帆船バイキング号遭難に関わる件について」米国務省公文書保存所所蔵
—神奈川駐在米領事フィッシャーより米国務長官宛の報告書（写）—
「バイキング号記念碑建立にいたるまでの経過報告」高橋基生講演記録
—昭和42年3月26日夜　御蔵島村立小学校での講演原稿—
「異国漂着一件，文久三年四月十八日」（村役場古文書）

【郷土資料館収蔵物】

「バイキング号 200 分の 1 精密模型」（1981 年）高橋基生寄贈
「バイキング号レリーフ」（1967 年）鈴木国義寄贈
「ロバート・F・ケネディーのメッセージ」（1967 年）
「英単語帳」「西洋黒船標難一件記」（レプリカ）
ロープの木製締具，アンカーリング（一部），船釘，バラスト石，ステーキ皿，
ステンドグラス，茶碗，除幕式記念に配布されたミニ銅板，栗本一郎翁の板書
（銅剣交換の経緯）その他，栗本一郎・高橋基生氏写真，パネルなど

【村内】

「記念碑」銅板，キャプスタン，錨，バラストの花崗岩（稲根神社境内）
「高橋基生先生顕彰碑」（稲根神社境内）
「船員と交換した銅剣，象牙の扇子」（祖霊社）
「バラストの花崗岩」（海岸，村内歩道，石垣など）

【その他】

「バイキング号の航海日誌」（ニューベッドフォード捕鯨博物館．栗本家より寄贈）
「バイキング号事件の銅板」（同上博物館．御蔵島の記念碑の銅板のレプリカ）